

[成果情報名]大粒で着色に優れた黒色系ブドウ新品種候補「甲斐ベリー3」の開発

[要約]「甲斐ベリー3 (生食ブドウ山梨3号)」は、大粒で着色良好な4倍体の新品種候補である。種なし栽培における成熟期は育成地において8月中旬である。果皮色は紫黒色で、果粒重は平均20gを超える。酸含量の低下が早く食味は優れる。

[担当]果樹試・育種部・生食ブドウ育種科・雨宮秀仁

[分類]技術・参考

[背景・ねらい]

山梨県内では、中生の黒色系大粒種として「巨峰」や「ピオーネ」が栽培されているが、近年、着色が不安定な傾向にあり、着色良好な新品種の開発が求められている。そこで大粒で着色良好な、本県のオリジナル品種を開発する。

[成果の内容・特徴]

1. 「甲斐ベリー3」は、平成17年に大粒で食味が優れる「ピオーネ」に着色良好な「山梨46号（「巨峰」×「巨峰」）」を交雑し選抜した4倍体の新品種候補である。
2. ジベレリン処理により種なし化した果房の成熟期は、育成地（果樹試験場Bゾーン標高450m）においては、8月中旬である（表1、図1）。
3. 果皮色は紫黒色で、「巨峰」や「ピオーネ」に比べ着色は優れる。myb遺伝子型がAE1E1E2であり、「巨峰（AAE1E2）」や「ピオーネ（AAE1E2）」に比べ着色性のmyb遺伝子E1を1つ多く有する（表1）。
4. 果粒の形は円形であり、果粒重は平均20gを超える。糖度は17%を超え、酸含量の低下が早く食味は良好である。裂果は、「巨峰」、「ピオーネ」に比べるとやや多く、小果梗周辺の微裂果が中心である。また、脱粒性はない（表1、図1、2）。

[成果の活用上の留意点]

1. 種なし化のためのジベレリン処理は「巨峰系4倍体品種」が適用される。果樹試験場では、満開時にフルメット5ppmを加用したジベレリン12.5ppm、満開2週間後にジベレリン25ppmで処理している。
2. 「巨峰」の慣行防除の下では、特に問題となる病害虫の発生は見られていない。
3. 花蕾の着生は「巨峰」に比べるとやや少ない。年によっては、落蕾が発生し、やや粗着な果房となることがある。このため、着粒安定のための植物成長調整剤の処理方法等を継続して検討中である。成熟期についても、年次変動・地域性が見られるため、継続して調査する予定である。なお、短梢栽培については、現在検討中である。
4. 本品種は平成28年1月28日付けで出願公表された。

[期待される効果]

1. 大粒で着色良好な黒色系中生品種の一つとして、今後、県内への導入が期待できる。

[具体的データ]

表1 「甲斐ベリー3」の樹体及び果実特性

(棚長梢剪定栽培)

品種	樹勢	満開期口 (月日)	調査日	果房重 (g)	果粒重 (g)	果粒形	はく皮の 難易	果肉特性
甲斐ベリー3原木	中	6/4	8/13~8/24	568	21.6	円	中	中間
甲斐ベリー3複製樹	中	6/3	8/21	628	20.3	円	中	中間
巨峰	強	6/3	8/13~8/23	473	12.8	倒卵	中	中間
ピオーネ	強	6/7	8/21~8/29	614	18.4	倒卵	中	中間

(続き)

品種	果皮色 (C.C.)	アントシアニン含量 ($\mu\text{g}/\text{cm}^2$)	myb遺伝子型	裂果粒数 (粒/果房)	糖度 (%)	酸含量 (g/100ml)	脱粒性
甲斐ベリー3原木	11.3	226	AE1E1E2	0.5	17.5	0.56	無
甲斐ベリー3複製樹	11.0	—	AE1E1E2	2.2	17.2	0.58	無
巨峰	10.2	168	AAE1E2	0.2	18.9	0.64	無
ピオーネ	8.9	89	AAE1E2	0.4	18.4	0.58	無

台木・調査年・樹齢：甲斐ベリー3原木(101-14台 2010~2015年 4~9年生)、甲斐ベリー3複製樹(101-14台 2014~2015年 4~5年生)、巨峰(5BB 2012~2015年 4~7年生)、ピオーネ(5BB 2012~2015年 4~7年生)

植物成長調整剤処理(甲斐ベリー3：満開時GA12.5ppm+F5ppm、満開2週間後GA25ppm、巨峰、ピオーネ：満開時GA25ppm+F5ppm、満開2週間後GA25ppm、2015年のピオーネ：満開時GA12.5ppm+F5ppm、満開2週間後GA25ppm)

アントシアニン含量は2012年、2013年、2015年の平均値。

原木の果粒重はかん水施設故障の2014年の平均値15gを除いた値。

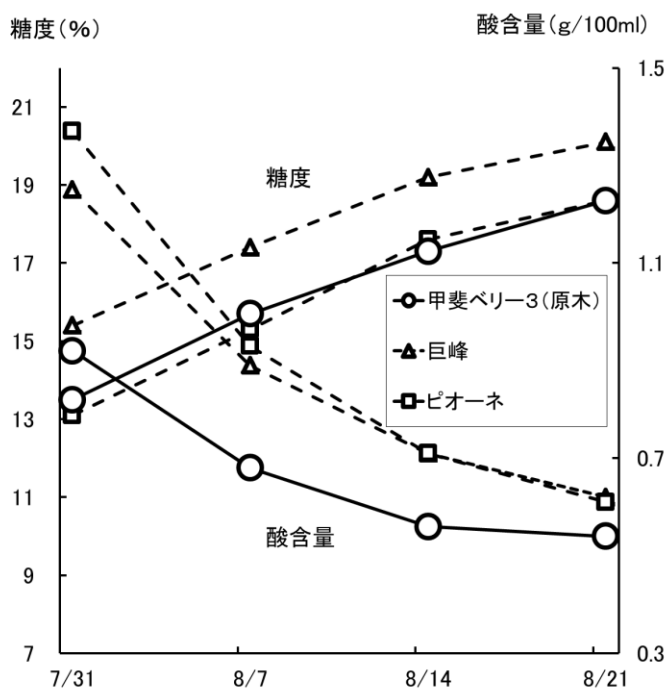


図1 糖度・酸含量の推移 (2012~2015年の平均)



図2 「甲斐ベリー3」の果実

[その他]

研究課題名：大粒で外観の優れるオリジナル品種の育成

予算区分：県単(重点化 2005~2013)

研究期間：2005~2015年度

研究担当者：雨宮秀仁、小林和司、塩谷諭史、山下浩輝、両角斉彦、猪股雅人